

樹木は育成することのない
Der Baum treibt unzählige Keime,
無数の芽を生み、
die unentwickelt verderben, und
根をはり、枝や葉を拡げて
streckt weit mehr Wurzeln, Zweige und Blätter
個体と種の保存にはあまりあるほどの
nach Nahrung aus, als zu Erhaltung seines Individuums
養分を吸収する。

und seiner Gattung verwendet werden.

樹木は、この溢れんばかりの過剰を
Was er von seiner verschwenderischen Fülle
使うことも、享受することもなく自然に還すが
ungebraucht und ungenossen dem Elementarreich zurückgibt,

動物はこの溢れる養分を、自由で
das darf das Lebendige in fröhlicher
嬉々としたみずからの運動に使用する。

Bewegung verschwelgen. So gibt uns die Natur

このように自然は、その初源からの生命の
schon in ihrem materiellen Reich ein
無限の展開にむけての秩序を奏でている。

Vorspiel des Unbegrenzten und hebt
物質としての束縛を少しずつ断ちきり、
hier schon zum Teil die Fesseln auf, deren sie sich
やがて自らの姿を自由に変えていくのである。
im Reich der Form ganz und gar entledigt.

フリードリヒ・フォン・シラー

Friedrich von Schiller

横浜みなとみらい駅の地下から上層階を貫通する巨大な吹き抜けの壁に、ドイツの詩人・劇作家のフリードリッヒ・フォン・シラーがデンマーク王子アウグステンブルク公に宛てた手紙の言葉がある。これを現代美術のアーティスト Joseph Kosuth が作品にした。22メートルもある黒い御影石には和訳が刻まれ、ぼうっと光る白色ネオン管には原文を読むことができる。

私はこの行間からコスースやシラーが何を意図としたか深読みを試みることなく、ただエスカレーターに乗りながら場を感じるのが好きだ。というか、動く階段に身をまかせ、偶然にも時を同じくして遷らされることになった人々という空間という作品が好きなのだ。

この場ではその都度、違うことを思い巡らしてしまう。

あの3年前はどんな思いで横浜に来ていたのだったか、2段前に佇むサラリーマンは壁を観ながらどんなことを考えているのだろうかとか、ひと昔は隣でつないだ息子の手は小さく頼りなかったとか、向いから楽しそうに降りてくるあの家族は今晚どんな夕飯をとるのだろうかとか、次はいったい何時ここに来れるのだろうか…。

その地下3階から地上1階までの長いエスカレーターに乗っているたったの数分間、いつもすてきなアートになる。

横浜という街は私の生まれ故郷ではない。たまたま両親が終の住処に選んだ場所であったので、幾度里帰りを重ねてもこの地でエトランジェでいたことは隠せない。ましてや人生の半分以上を海外で暮らしてしまうと『日本国』そのものが異邦になってくる。それでも3年前に父が旅立ち、実家を手放すことになってからも、母が居る限り横浜は姉と私にとって舞い戻ることのできる巢のある場所だった。

梅雨前には母の葬儀も終わり、姉もスペインに帰って、ドイツ出発前の東京のホテルに移る最後の横浜の夜、みなとみらい地区を夫と歩いた。今回の帰国は、なんと目まぐるしい滞在だったことだろう。2年間分の用事をたった2週間でこなしたような、長いようでありながらあっという間の2ヶ月だった。

その時、大観覧車のデジタル時計の表示が大きく 21:00 に変わった。そうして遊園地の方角から閉館を知らせる「蛍の光」のメロディーが流れてきたのである。

母もなくなり、これから日本に帰る最大の理由も無くなった…。
葬儀後の雑事にかまけて 20:59 までは心の隅に押しこんでいた感情を「蛍の光」が否応無しに煽ってくる。海風は頬を殴るような荒さではなく、湿り気のある生暖さで心の髓までじわじわ染みとおる。
冷たく柵も閉まった人っ子ひとりいない真っ暗な子供遊園地に別離の曲のコンビネーションは、観覧車のフルカラーのライトアップの中で粗悪なソープオペラのワンシーンのように安っぽく、演歌の歌詞のように出来すぎで嘘っぽい。
昔、幼い息子が日本のおじいちゃんとおばあちゃんに連れられて、メリーゴーランドに乗ったのもこの場所だ。泣きたいのに、笑わなければ済まされないほどの物悲しさを、この場に及んでへたな演出をするのはやめてくれ！

夫の手をぎゅっと握り直して、「どこに住もうが、私のふるさとはあんたの所だよ」と、見得を切らずにはいられなかった。

母は、まるで植物が枯れるように自ら然るままにコトリと逝った。
そのいのちは、シラーのごとく“初源からの生命の無限の展開にむけた秩序のなかに組み込まれていき、物質としての束縛を断ち切って今頃は自らの姿を自由に変えている”のだろう。

生と死を繰り返す無限の展開というものは、現世の人間などの物差しにはみじんも及ばない、唯々大きく荘厳な次元にあるのだろう。
母を看取った日々は、現世の人間の常識や価値観に囚われないことがいかに難しいかを体験し、またほんの少しでもそれを捨てたら楽になれると学ぶための貴重な時間だったと思う。

老いることで目がかすみ、耳がとおくなり、鼻も利かなくなり、歯も抜けて味覚がなくなり、触感も鈍くなっていくことは、五感など無いそんな世界へ旅立つための準備なのかもしれない。惚けることで、色・受・想・行・識が空（くう）であるのが当たり前前の次元へ逝くための練習なのかもしれない。生まれた時のように無垢に戻るための粋な神の配慮なのかもしれない。

それでも、そんな無限の展開の一コマとして奇遇にもこうして生き、いろいろな土地で様々な人々と出会い、互いに愛を感じることが出来るのは何という幸運なのだろう。現世以外の次元がそんなに無限大なのであれば、この人生という一瞬はなんと希有で貴重なのだろう。

老いや死もわるくない、けれど生はもっとすてきだ。

最期の日まで意識のあった母が、言葉の代わりに枯れ枝のような手を合わせ、感謝していた姿がいつまでも忘れられない。

合掌

2017年7月4日

フランクフルト中央墓地にて、母の埋葬式

真美

偶然にも私と同じ瞬間を、現世エスカレーターに乗ることになったすべてのいのちにこのエッセイを捧げます。